

## 「中高年女性の腰痛と妊娠・分娩の 相互関連に関する検討」

### —妊娠分娩産褥に関連した中高年好発疾患—

分担研究：「女性の健康からみた母子保健のあり方に関する研究」

研究協力者

野澤 志朗  
荒木 勤  
大濱 二明  
太田 牧田  
進 和也  
上田 英喜  
克憲

志朗  
勤  
二明  
牧田  
小西  
英喜  
克憲

(慶応義塾大学産婦人科)

(日本医科大学産婦人科)

(広島大学産婦人科)

(慶応義塾大学産婦人科)

(日本医科大学産婦人科)

(広島大学産婦人科)

共同研究者

要約：妊娠・分娩の経験の有無が中高年女性の好発疾患の1つである腰痛とどのような相互関連を有するかを検討することを目的に本調査を行った。

更年期外来を受診した100例の中高年女性患者（平均年齢：53.9±8.3歳）に対し、①妊娠・分娩歴②妊娠・分娩時ないし現在の腰痛歴③主にペインクリニック等で痛みの客観的評価法として用いられているvisual analogue scale (VAS)による腰痛の自己評価についてアンケート調査を実施した。その結果、

①対象者100例中73例に現在腰痛が認められ、その初発年代としては、40～50歳代が最も多かった。

②現在腰痛を認める者の約60%に、程度の差はあれ、妊娠・分娩時に腰痛を認めていた。

③VAS値が、2未満の群（軽度群）では、それ以上の値を示す中等度群ないし高度群に比し、妊娠歴ないし分娩歴のない症例が多く認められた。

④VAS値が5以上の高度群（n=20）では、明らかに妊娠・分娩を契機に腰痛が発症した症例が多く認められた。

以上から、中高年期の日常生活に支障のある高度の腰痛では、妊娠・分娩時の腰痛がその発症に関与している可能性が示唆された。

見出し語：腰痛、妊娠、分娩、中高年女性

visual analogue scale (VAS)

#### 1. 中高年女性の腰痛について

腰痛は立位歩行を行なう人類にとって宿命的な症状

であり、老若男女を問わず一生のうちに80%くらいの方が経験するといわれている。

女性の腰痛の原因として、整形外科的疾患に起因するものが多いと通常考えられているが、産婦人科領域においても、腰痛は出血・下腹部痛と並んで多い主訴のうちの一つで、ことに中高年を対象とした更年期外来などの特殊外来ではしばしば遭遇する主訴である。

腰痛を主訴として病院を受診する場合、一般的に整形外科を受診することが多いが、腰痛者の原因として明らかな脊椎の変化を認めない、いわゆる「腰痛症」「その他の脊柱疾患」による受療率は50歳前後にそのピークがあるといわれている。

以上のことから中高年女性の腰痛の原因として画像診断や血液検査では検出されない日常動作による椎体周囲の靭帯や筋肉の疲労によるものや、更年期障害によるいわゆる自律神経失調症としての不定愁訴がその要因として加わっている可能性が考えられる。さらに血流分布の異常、特に骨盤内の血液の流れが停滞している状態すなわち漢方医学的にいわれている「瘀血」もその原因の1つに含まれると考えられる。

一方、妊娠に関連した腰痛として骨盤内の血液の鬱滞により、妊娠全期間を通じ慢性的鈍痛を自覚することがあることも事実である。

そこで、中高年女性の好発疾患の1つといえる腰痛と妊娠・分娩歴の両者に相互関連性があるか否か

を検討した。

## 2. 研究対象と方法

### 1) 研究対象

更年期外来を受診した中高年女性患者100例（平均年齢：53.9±8.3歳）を対象とした。

### 2) 研究方法

外来受診時にアンケート調査を施行し、

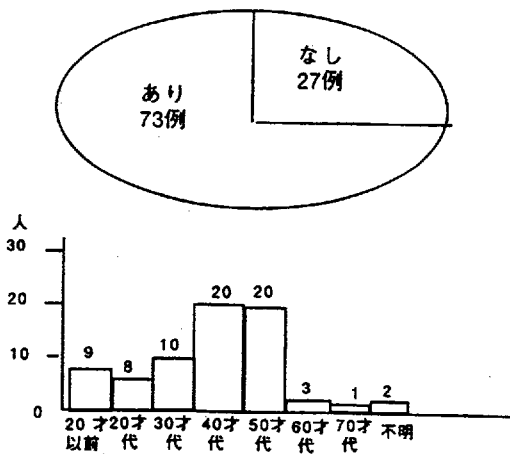
- ①妊娠・分娩歴
- ②妊娠・分娩時ないし現在の腰痛歴
- ③visual analogue scale (VAS) を用いた腰痛の評価に関して検討を加え、腰痛と妊娠・分娩歴の相互関連性についての評価を行なった。

## 3. 結果

### 1) 腰痛の有無と初発年齢

対象者100例のうち現在腰痛ありと回答した者は、73例（73%）であり、その初発年齢は40歳代と50歳代がそれぞれ20例で最も多かった。

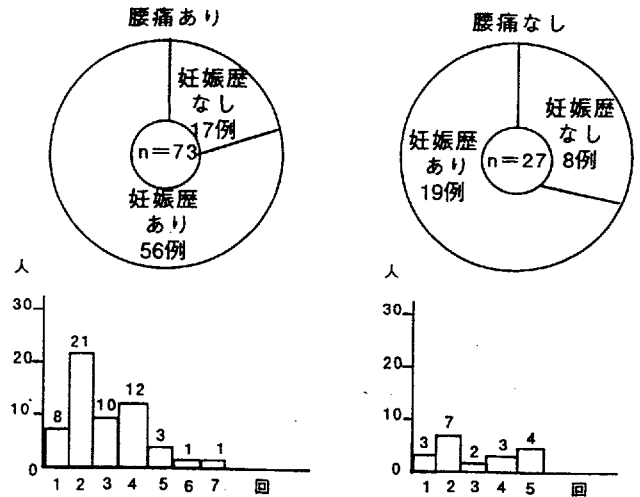
(図1) 腰痛の有無と初発年齢



### 2) 腰痛の有無と妊娠歴

腰痛ありと回答した73例のうち妊娠歴のある者は、56例（76.7%）であり、妊娠回数は2回と回答した者が最も多かった。また、腰痛なしと回答した27例のうち妊娠歴のある者は19例（70.4%）であり、妊娠回数は2回と回答した者が最も多かった。従って、腰痛の有無により妊娠歴には有意差を認めなかった。

(図2) 腰痛の有無と妊娠歴

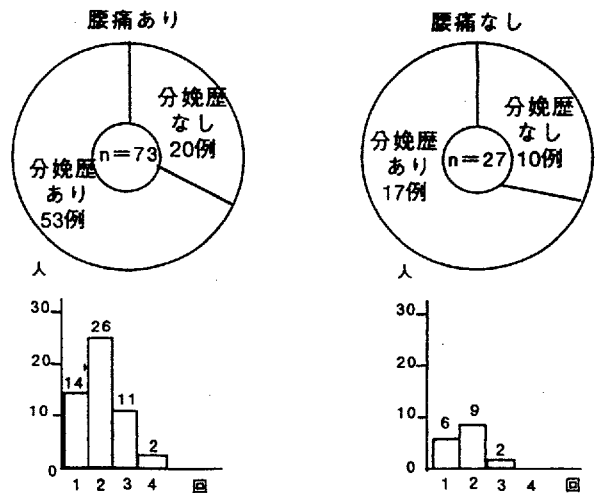


### 3) 腰痛の有無と分娩歴

腰痛ありと回答した73例のうち分娩歴のある者は、53例（72.6%）であり、分娩回数は2回と回答した者が最も多かった。また、腰痛なしと回答した27例のうち分娩歴のある者は17例（63.0%）であり、分娩回数は2回と回答した者が最も多かった。

従って、腰痛ありと回答した群の方が、腰痛なしと回答した群に比し分娩歴のある者の比率が明らかに高かったが、分娩回数には有意差を認めなかった。

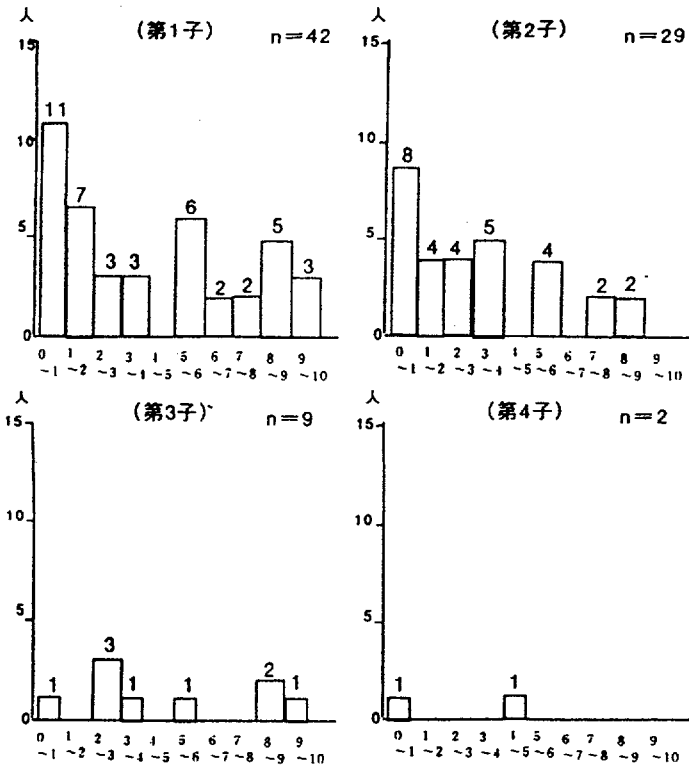
(図3) 腰痛の有無と分娩歴



### 4) 妊娠・出産直後にみられた腰痛のVAS値

retrospectiveに調査した妊娠・出産直後にみられた腰痛のVAS値は、5未満が多い傾向が認められ、比較的軽度～中等度の痛みであった。

(図4) 妊娠・出産直後にみられた腰痛のVAS値



(図6) VAS値の程度と妊娠・分娩歴

軽度: 2未満  
 中等度: 2~5  
 高度: 5以上

|        |    | 軽度 (n=18)  | 中等度 (n=20) | 高度 (n=20)  |
|--------|----|------------|------------|------------|
| 妊娠歴    | なし | 8例 (44.4%) | 2例 (10%)   | 1例 (5%)    |
|        | 1回 | 2例 (11.0%) | 2例 (10%)   | 3例 (15%)   |
|        | 2回 | 3例 (16.7%) | 7例 (35%)   | 7例 (35%)   |
|        | 3回 | 1例 (5.6%)  | 2例 (10%)   | 3例 (15%)   |
|        | 4回 | 3例 (16.7%) | 3例 (15%)   | 6例 (30%)   |
|        | 5回 | 0例         | 3例 (15%)   | 0例         |
|        | 6回 | 0例         | 1例 (5%)    | 0例         |
| 分娩歴    | なし | 8例 (50.0%) | 2例 (10.0%) | 1例 (5%)    |
|        | 1回 | 2例 (11.0%) | 3例 (15.0%) | 5例 (25.0%) |
|        | 2回 | 4例 (22.4%) | 11例 (55%)  | 9例 (45%)   |
|        | 3回 | 2例 (11.0%) | 4例 (20.0%) | 4例 (20.0%) |
|        | 4回 | 1例 (5.6%)  | 0例         | 1例 (5%)    |
| 年齢 (歳) |    | 56.5±9.6   | 52.0±8.8   | 53.6±7.5   |

7) VAS値の程度と分娩時の背景

VAS値の程度と分娩時の背景を3群間で比較してみると、分娩形態や難産の経験に関しては、3群間で有意差を認めなかったが、妊娠・分娩時における腰痛は軽度群と高度群では、60%以上に認められた。

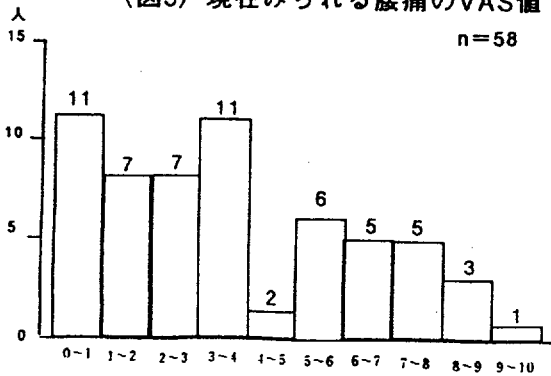
(図7) VAS値の程度と分娩時の背景

|           |     | 軽度 (9例/18例) | 中等度 (18/20例) | 高度 (19例/20例) |
|-----------|-----|-------------|--------------|--------------|
| 分娩形態      | 正常  | 7例          | 16例          | 18例          |
|           | 吸引  | 2例          | 4例           | 3例           |
|           | 鉗子  | 0例          | 0例           | 1例           |
|           | 帝王切 | 1例          | 3例           | 0例           |
| 難産の経験     | なし  | 5例 (55.6%)  | 11例 (61.1%)  | 15例 (78.9%)  |
|           | あり  | 4例 (44.4%)  | 7例 (38.9%)   | 4例 (21.1%)   |
| 妊娠・分娩時の腰痛 | なし  | 3例 (3.4%)   | 10例 (55.6%)  | 7例 (36.9%)   |
|           | あり  | 6例 (66.6%)  | 8例 (44.4%)   | 12例 (63.1%)  |

5) 現在みられる腰痛のVAS値

腰痛ありと回答した73例のうち58例 (79.5%) にVAS値の記載があり、5未満の値を記入した者が36例 (62.1%) であった。

(図5) 現在みられる腰痛のVAS値



8) VAS値の程度と腰痛歴

現在の腰痛の初発年代は、3群間の比較検討でも40~50歳代が最も多かったが、VAS値が5以上の高度群では、明らかに妊娠・分娩を契機に腰痛が発症したと回答した者が6例 (30%) 認められた。

(図8) VAS値の程度と腰痛歴

|            |        | 軽度 (n=18)  | 中等度 (n=20) | 高度 (n=20) |
|------------|--------|------------|------------|-----------|
| 現在の腰痛の初発年代 | 20歳前   | 1例 (5.6%)  | 3例 (15%)   | 2例 (10%)  |
|            | 20代    | 3例 (16.7%) | 1例 (5%)    | 5例 (25%)  |
|            | 30代    | 1例 (5.6%)  | 2例 (10%)   | 5例 (25%)  |
|            | 40代    | 2例 (11.0%) | 8例 (40%)   | 5例 (25%)  |
|            | 50代    | 6例 (33.4%) | 5例 (25%)   | 3例 (15%)  |
|            | 60代    | 2例 (11.0%) | 0例         | 0例        |
|            | 70代    | 0例         | 1例 (5%)    | 0例        |
| 不明         |        | 3例 (16.7%) | 0例         | 0例        |
| 現在の腰痛のきっかけ | 前になし   | 8例 (44.5%) | 13例 (65%)  | 8例 (40%)  |
|            | 妊娠・分娩歴 | 0例         | 1例 (5%)    | 6例 (30%)  |
|            | ぶつくり歴  | 2例 (11.0%) | 3例 (15%)   | 4例 (20%)  |
|            | その他    | 8例 (44.5%) | 3例 (15%)   | 2例 (10%)  |

6) VAS値の程度と妊娠・分娩歴

VAS値により、2未満を軽度群 (n=18)、2~5を中等度群 (n=20)、5以上を高度群 (n=20) と分類すると、軽度群では中等度群や高度群に比し、妊娠歴ないし分娩歴のない症例が多い傾向が認められた。

#### 4. 考 察

中高年女性の腰痛は、整形外科のみならず婦人科領域においてもしばしば認められる愁訴であり、今回の調査でも更年期外来という特殊外来ではあるが、実に70%近くの受診者に認められた。これらの症例のほとんどは、明らかな器質的疾患を認めないいわゆる「腰痛症」と考えられるが、その初発年代が40~50歳代に集中していることから、妊娠・分娩が直接契機となって発症した腰痛はそれ程多くないものと思われた。

しかし、腰痛の有無と妊娠・分娩歴との関係でみると妊娠歴は有意差を認めなかったが、腰痛ありの群が腰痛なしの群に比し、分娩歴のある者の比率が高かったことより、分娩が中高年女性の腰痛に何らかの影響を及ぼしている可能性が示唆された。

妊娠・分娩により生じる腰痛は、骨盤内の血液の鬱滞、体重増加による椎体への負担、腹部の増大や関節のゆるみによる仙腸関節の機能不全、分娩時の体位等が原因となり発生すると考えられ、時に日常生活にも重大な影響を及ぼす高度の腰痛を認める症例もみられる。このような症例では、椎体や骨盤、あるいは関節靭帯に器質的な変化が生じ、それが分娩後も改善されずその後の腰痛発症の危険因子となっている可能性もあり、そのためには、腰痛の程度や具体的な性状等も十分検討しなければならないと思われる。

そこで一般に疼痛の程度は個人差が大きく、客観的評価は難しいのが現状ではあるが、今回主にペインクリニックで使用されているvisual analogue scale (VAS)をこの腰痛の評価に用いた。妊娠・出産直後にみられた腰痛に関してのVAS値はそれ程高値ではなかったが、現在の腰痛に関しては、2未満の軽度群 (n=18)、2~5の中等度群 (n=20)、5以上の高度群 (n=20)の3群がほぼ同数認められた。そしてVAS値が5以上の高度群において、妊娠・分娩を契機に腰痛が発症した症例が多く認められたことより、日常生活に支障を及ぼす高度の腰痛を持つ中高年女性では、妊娠・分娩がその契機の1つとなった可能性が示唆された。

しかし、腰痛の原因に関しては、まだまだ不明な点も多く、単に「腰痛症」と安易に診断を下すことなく十分に器質疾患を除外することが重要であり、今回の対象者についても再度X線写真の所見等を解析する必要があると思われた。

また妊娠・分娩時の腰痛は、ややもすればやむを得ないものとして軽視される傾向があるが、日常生活に支障を及ぼすような高度の腰痛に対しては十分な対応を行なうことが、中高年女性のQOLの向上の一助とな

るものと思われる。

#### 5. 文 献

- 1) 厚生省大臣官房統計情報部編：患者調査（上巻）. 東京：厚生省, 610, 1986
- 2) 太田博明：産婦人科における痛み／中高年の腰痛. 産婦実務 41：1671-1676, 1992
- 3) 太田博明, 牧田和也, 他：中高年女性の腰痛. 産婦治療 73：286-292, 1996
- 4) 牧田和也, 太田博明, 他：中高年健康維持外来の開設5ヵ月における現況について. 日更年期医誌 1：86-92, 1993
- 5) 川上俊文：「腰痛」質問表. 図解腰痛学級. 東京：医学書院 156-164, 1986
- 6) 佐藤愛子, 中谷勝哉：痛みの質の分類 (1) pain descriptive wordsからのアプローチ. 第49回日本心理学会大会発表論文集：776, 1985
- 7) 太田博明, 高松 潔, 他：機能性月経困難症に対するvisual analogue scale (VAS) の有用性とするvisual analogue scale (VAS) の有用性とTJ-68 (芍薬甘草湯) の鎮痛効果に関する検討. 産婦人科漢方研究のあゆみNo13 東京：診断と治療社 25-29, 1996



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:妊娠・分娩の経験の有無が中高年女性の好発疾患の 1 つである腰痛とどのような相互関連を有するかを検討することを目的に本調査を行った。

更年期外来を受診した 100 例の中高年女性患者(平均年齢: 53.9±8.3 歳)に対し、(1)妊娠・分娩歴(2)妊娠・分娩時ないし現在の腰痛歴(3)主にペインクリニック等で痛みの客観的評価法として用いられている visual analogue scale (VAS)による腰痛の自己評価についてアンケート調査を実施した。その結果、

(1)対象者 100 例中 73 例に現在腰痛が認められ、その初発年代としては、40~50 歳代が最も多かった。

(2)現在腰痛を認める者の約 60%に、程度の差はあれ、妊娠・分娩時に腰痛を認めていた。

(3)VAS 値が、2 未満の群(軽度群)では、それ以上の値を示す中等度群ないし高度群に比し、妊娠歴ないし分娩歴のない症例が多く認められた。

(4)VAS 値が 5 以上の高度群(n=20)では、明らかに妊娠・分娩を契機に腰痛が発症した症例が多く認められた。

以上から、中高年期の日常生活に支障のある高度の腰痛では、妊娠・分娩時の腰痛がその発症に関与している可能性が示唆された。